

2015 年 1 月 22 日「伝道者としての業」

＜ 聖書箇所 ＞「テモテへの第二の手紙 4 章 1 節～5 節」

神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。しかし、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。

＜ 説教抜粋 ＞「伝道者としての業」

今日の説教の題名は「伝道者としての業」です。聖書箇所は、テモテへの第二の手紙 4 章 1 節～5 節です。テモテへの第二の手紙の著者は、伝統的にはパウロとされていますが、パウロの死後、第三者の手によって書かれた手紙だという説もあります。

「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。」。ここには著者とされるパウロの立場が書かれています。つまり、パウロの願望がキリストの出現であることがわかります。

このキリストの出現とは、キリストの再臨のことを指しています。いつ、いかなる形で、また、どのような姿でキリストは再臨されるのか。また、キリストの再臨によってもたらされるものが一体何であるのか。キリストの再臨でもたらされるものは「神の国」であると考えられてきました。

そのために、「御言を宣べ伝えなさい。」とあるように、御言をいかに宣べ伝えるのかということがテーマになります。さて、再臨のキリストや、御国を宣べ伝えて行くことは、確かに素晴らしいことです。しかし、たとえどんなに素晴らしいものであったとしても、伝え方によっては、その価値を低めてしまう場合もあります。

百の価値があるものを、もしも八十の価値で伝えることができたとするならば、概ねその価値を伝えたことになるかもしれません。しかし、もしかしたら、百のものを二十、もしくは十、さらにはマイナス二百で伝えてしまっている私たちであるかもしれません。

逆に、十の価値しかないものを三十や百、さらには千として伝えてしまったらどうでしょ

うか。これは、決して奨励されるべきものではありません。「時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」。たとえどんな環境であったとしても、私たちは、変わらぬ心で人に接することが必要です。

「人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。」。今度は聞く側の姿勢の話でもあります。話を聞く側としては、真実の言葉を聞いた時、その人は、真実の言葉に沿った姿になる努力が必要となります。

どんなに素晴らしい話を聞いたとしても、それを実践する姿勢がなければ、それは単なる言葉にしかすぎません。私たちは、耳ざわりのよい言葉だけを選択し、厳しい言葉を聞かないような傾向があります。私たちは、厳しい言葉の背後にある愛を見いだして行かなければなりません。「しかし、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。」。

求道者としての姿勢は、あくまでも謙虚であるべきです。たとえ感謝し難い環境であったとしても、その背後に、もし私を愛する神様の姿を見つけ出すことができたとするならばどんなに素晴らしいでしょうか。私たちは伝道者であると同時に求道者でもあるのです。